「お祝いする、お祝いされる」

本校幼稚部で誕生会がありました。全国の幼稚園では大なり小なり誕生会は本校同様に行っているでしょうし、また、各家庭におかれても家族で子どもの誕生をお祝いすることはしていることと思います。

私も 50 年ほど前の幼少期において、兄弟の誕生を祝い、友達のお祝いに招かれた記憶があります。恥ずかしながら、幼少期の自分にとっての一番の楽しみは、お祝いすることよりも普段はあまり目にすることのない豪華なごちそうを食べることだったように思います。

私は小さい頃からずっと書道が好きで現在まで続けています。大人になったあるとき、東京でお世話になっている先生が、全国規模の書道展の祝賀会で、こんなことを私に言ってくださいました。

「祝賀会は受賞した人のためにあるのだけれど、受賞者の方たちの頑張りをお祝いする人たちがいてはじめて成り立つもの。だから、たくさんの人たちでお祝いすることが大切で、もし自分が受賞する立場になったときは、そのありがたみが良く理解できるようになるし、感謝の気持ちがわかるようになる。」と

それ以来、できる限り祝賀会には上京して、気持ちを込めて祝福するようにしました。

このような自分の経験を振り返りながら、本校幼稚部の誕生会を、廊下から見学しました。

本校の職員は主役である誕生者の良いところをたくさん紹介していました。それは日々の学校生活の中で見いだした本児の好きなことや得意なことを、誕生会のプログラムの中に、しっかりと取り入れて構成されていました。虫が好きな本児が、どんな虫が好きかを紹介したり、自分が得意である鉄棒を実際に行ったりして、友達や教職員、保護者の方から、たくさんの拍手をもらいました。また、ローソクを 6 本立てて、火を吹き消すことができたときには、ジャンプしてその喜びを表現しておりました。

プログラムの中のローソクを吹き消すことは「息の出し方」に、ローソクを 6 本数えて立てることは、「数とことばの概念の構築」につなげるなど、聾学校の専門性が随所に展開されておりました。

友達もどんな虫かを興味深そうに眺めたり、鉄棒を披露している様子をしっかり見たりと、主役の誕生者に注目して、みんなと一緒に大きな拍手をしてお祝いしていました。

誕生会での「お祝いする、お祝いされる」経験が、友達の良さを認め合い、共に生きる仲間の存在として成長することを願ってやみません。

幼稚部の時期に、じっくりゆっくり子どもたち同士の関わりを深めていくことの重要性を再認識しました。そして、大人になったときに、お互いが感謝の気持ちがわかることにつながってほしいと、誕生会を目を細めて参観しました。